

まとめ—実験展示は成功したか

福田 アジオ

私どもの21世紀COEプログラムは、その申請段階から研究成果を展示によって発信するということを予定し、計画書に記載していた。その際、博物館ではできない冒険的な試みを行うことを実験という言葉にこめた。博物館展示はどのような場合であっても研究成果を展示するものであり、私どもの実験展示も研究成果を展示するという点で同じである。ことさらに研究成果を展示するか、実験展示を行うという必要はない。それを敢えて研究成果を展示する実験展示と称してきたのか。それは私どものプログラム自体に関係する。

私どもの実験展示は、単なる研究成果を展示するという一般的な表現で説明するものではない。私どもの課題である「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、茫漠とした広大な非文字の世界から、図像、身体技法、環境・景観の三つの事象を取り上げ、それらの資料化、分析法の開発、そして分析結果の発信を体系化という言葉で表現してきた。実験展示はその分析結果の発信に位置づけられる。従って、実験展示は研究成果一般ではなく、図像、身体技法、環境・景観の三つを展示という方法で統合し世界に発信することを意味した。

図像、身体技法、環境・景観の三つをただ横並びに置いて展示を構成することでは統合、さらには、体系化は実現しない。種々検討の結果、展示の中核には身体技法を置き、さらに具体的には「あるく」という誰でもが日常的に行っていることを中心に据えた。そして、図像や環境・景観との関係性を求め、三者の統合を図り、COEの成果を発信するはずであった。しかし、展示経過で確認できるように、私どもの21世紀COEプログラムの課題である図像、身体技法、環境・景観を統合して展示を構成することは実現できなかった。今回の展示は、基本

的には、身体技法に特化した組み立てとなった。各種図像資料は説明データとして活用したが、身体技法と図像が統合される展示にはならなかった。まして環境・景観は展示の中にほとんど組み込まれずに終わった。その点で、当初予定した展示を通して図像、身体技法、環境・景観を統合し、体系化するという目論見は成功しなかったといえる。その点は率直に反省しなければならない。

身体技法、特に歩くという行為に特化した展示は、そのような類例がなく、あまりに平凡であり、人々にとって自覚することのない普遍的なことからである。それを展示テーマにすることは大きな冒険であり、その点でまさに実験展示であった。展示テーマを絞り込む過程で「歩くで大丈夫？」という疑問も提起されたことには正当性があった。歩くという行為に文化が関係しているのかという大きな疑問が横たわっていた。その点に注意し、歩くという行為に文化を見るという観点を失わず、また展示を見ることで何らかの感動やショックを受けるような仕掛けを考えることにした。

展示の中心部を構成したのは、観覧者が自ら様々な歩きを体験して感じ、考える「あるく回廊」であった。参加型の展示は今までも試みられてきたが、今回の展示ではそこに中心を置き、その体験を基礎にして他の展示手法で示された資料を見て考えるという方式を採用した。会場に来た人々は、その仕掛けに興味を持ち、多くの人々が実際に「あるく回廊」を体験した。総じて好評であった。この点、成功であった。

実験展示を構想したときの実験の内容として、あと二つの点があげられていた。一つはバリアフリー、あるいはユニバーサルデザインの展示である。身体障害者の人々にも展示が有効な情報発信の方法であ

ることを示そうとした。従来からバリアフリーと言えば、主として車椅子での観覧への配慮が考えられ、多くの試みの蓄積がある。私どもも車椅子での入場を前提にして建物のエントランスからの導入を行い、種々工夫をした。それ以上に、今回の私どもの課題としたのは視聴覚障害をもつ人たちに展示を見て貰う工夫をすることであった。展示資料はもちろん、映像もまた「あるく回廊」の体験も、視覚障害者にとっては認識し理解することが困難なものである。展示内容を視覚障害者に理解できるように組み立てることを課題とした。そのため盲学校の先生方とも協議し、展示方法を考えたが、結果的にはわずかに「あるくにさわる」展示のみになった。その点いささか実験としては寂しい展示であった。

もう一つの実験は、これもすでに多くの博物館が実践しており、実験とは言えないかもしれないが、展示を作る過程に関係者以外の意見や考えを聞くということであった。一般の博物館であれば、市民参加と表現されるものである。展示準備段階、それから展示開催中に意見をもらい、その意見によって修正していくという方式である。それは計画策定で固定してしまうのではなく、計画当初から展示終了まで絶えず進化していく展示の構想である。これについても若干の試みを行ったが、時間的余裕がなく、ほとんど目に見えるほどの進化を果たせなかった。こ

れも残念な点である。

以上のように、当初計画を基準に実施した展示を点検すれば、実験展示としての目標を達成したとは言えない。限られた時間のなかで、いわゆる学芸員職を内部に持たないプロジェクト研究では、行えることは限られている。歩くことの展示に力を集中させ、その実現を図ったことはやむを得なかったと判断している。

展示は、観覧者が歩くことを自覚し、その文化を考える契機になったという点では成功したと自己評価できる。体験を中心に置いて、それを他の展示と結びつけ、歩くことの文化を考えるという仕掛けは十分に目的を果たしたと言える。特に、多くの博物館展示のように、観覧者がただ単に展示を黙々とみて帰っていくのではなく、実際に身体を用いて体験し、しかもそこには体験への案内をするインストラクターがいて、会話をしつつ、体験するということが行われた。博物館の展示コーナーにいる解説員は一方的に解説するのみであるが、インストラクターは演技で示し、解説し、疑問に答えるという役割を果たした。これは効果的であった。

この貴重な経験を生かして、本プログラムの拠点である日本常民文化研究所の展示、また大学院歴史民俗資料学研究科の博物館関係カリキュラムなどでの実験を進めていきたい。 (ふくた・あじお)